

SMAART (スマート)

発生の場 レビュー



はじめに

2020年smart、最終年度の最後のアートプロジェクトである「発生の場」。会場グループとして設営に参加、受付スタッフ及び、観覧させていただきました。会場設営の過程とスタッフ、そして観覧に訪れた来場者の3つ目線が持てた事は貴重な経験でした。

鈴木さんの作品

鈴木さんの作品を見て感じたことは、デジャヴ感があるということです。日常な中で「アレッ」と思うひっかかりが作品の中で追体験ができました。ブンブンなって横たわる扇風機

は、子どもが遊びそうな場面です。もちろん、我が子が同じことをしたら注意し扇風機を起こしますが、振動や音、動きが面白く無邪気な子ども心を思い起こします。有田焼の展示では、同じ風景を時代を超えて何人もの人が描いたものを比較する展示で、この風景を何人の作り手が同じ映像を思い浮かべたのだらうと思う感慨深い作品です。紙吹雪のインスタレーションはハレの日が思わせる楽しい作品。後片付けまでがセットになっていることも面白いと思いました。来場者は面倒なのか試してみる人は少なかったようです。やはり、祝ってもらおう対価はそれなりに必要なのだということなのではないでしょうか。高い場所に設置された映像作品も距離を置いてみることで立体的な印象をうけます。

チェさんの作品

チェさんは、壁一面を使ったコラージュが主な作品でした。香港でのデモの様子は、私のひと世代前の学生運動を思いださせます。壁一面から迫ってくる大きさというものもひとつの表現なのだと思います。近くでみるとひとつひとつ感情が伝わってきます。これから、どうやってこの問題は終息してゆくのだらうと考えさせられる作品でした。

福田さんの作品

同じく大きなサイズですが、チェさんの作品を「動」としたら、福田さんの作品は「静」です。囲まれた壁4面の作品がひとつの作品として構成されていました。シンとした空間に外から漏れる自然光に反射する少し端の丸まった銀箔が昆虫の背中のようなロケットのような不思議な感じです。整然と規則的に並ぶ銀箔なのに、丸まり具合が微妙に違うことで無機的なものが有機的なものに変化していました。また、この大きな空間も不可欠な要素なのだと思います。大きいけれど閉ざされ内に向かう作者の世界観を感じます。

上村さんの作品

上村さんの作品は、造形という感じで美術展でよくなじみのある表現でした。やはり、大きいというサイズ感は大事だなと感じます。大きな積み木のような作品が迫力がありました。ビビットな色の組合せがスタイリッシュでおしゃれでした。